
ただ剣を振るう

おいしい麦茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただ剣を振るう

【Nコード】

N1638M

【作者名】

おいしい麦茶

【あらすじ】

とある世界で少年が死んだ。少年は別に死ぬのは怖くなかった。だが、親孝行ができなかったのが唯一の心残りだった。そして少年は新しい世界で新しい自分を始める……（変なあらすじですいません。ファン方は見ないほうがよろしいかと……）

プロローグ（前書き）

初めまして、おいしい麦茶です。

小説を書くのは初めてではありませんが、一向に上達しません。

それでも読んでやるよという方は、感想とアドバイスをお願いします。

プロローグ

思えば長い人生だった…

たった17年の人生だったが、それでも俺は長いと感じたのだ。

何故、自分が死んだのかはわからない。でも、なんとなくそう思ったのだ。

本当にいろいろな事があった。

3歳のころ母が死んだ。

俺はよく覚えていない、だがその時からだろう。父があれてしまったのは。

そして俺は父とケンカし、7歳のころ祖父の家に逃げ出した。

今ならわかるが、当時の俺はどうしようもないクソガキで、父が嫌いで仕方が無かった。

結局、父と仲直りすることはなかった、後から聞いた話しでは孤独死したらしい。

それから、祖父に剣術を学んだり、彼女ができたりといろいろなことがあった。

だから俺は十分に生きた。心残りは親孝行ができなかったことだが……

辺りが明るくなる、夢から覚めるのだ。

さあ、始めよう、新しい自分を……

くプロローグく

「おはよう、なの太。今日もかわいいわね」

「…おはよお。」

舌足らずの声でなんとか、返事をする。

もう一度言おう、確かに俺は死んだ。やがて俺は…

生き返った。

わけがわからなかった。

目が覚めて、ココがあの世界かと思ったら、視界には見覚えの無い天井があった。

何事だと思い、立ち上がろうとするとなかなか立てずに困惑していた。

なんとか立ち上がると、見知らぬ女性が俺をみてこう言ったのだ。

「し、士郎さん！なの太が！なの太が立ったわ！」

なの太って誰だ？

勘違いをしているのだろうと思い、なんとなく手を見ると俺は驚愕した。

手が縮んでいるのだ。幼児ぐらいの大きさに。

よく見ると女性にも見覚えがあった。

栗色の長髪に、童顔のかわいらしい顔。

高町桃子

ありえない、だってあれはアニメのキャラクターで、実際にはいい人間だ。

混乱していると、誰かにいきなり持ち上げられた。その人物にも見覚えがあった。

高町士郎

俺は理解してしまった。こんな偶然は二度も起こるはずがない。

自分はアニメの世界……リリカルなのはに来てしまったということ。

「ちかれた……」

迫り来る敵（高町夫妻）を何とか倒し、昼寝をしている俺であった。
……しゃべり方がおかしいのは、幼児化したせいだ。

どうやら高町夫妻は、パパ、ママと呼んでほしいらしい。
恥ずかしいので呼べないが、そのせいで我が兄が被害を受けているらしいが知らん。

「へーわだなあ……」

毎日、ラブラブしている家族をみてそう思った。
おそらく彼らは俺の前の家族のようににはならないだろう。
夢に見ていた生活が手に入ったのだ。これ以上の幸せはない。

俺は薄れ行く意識の中で、前の家族の分まで親孝行をすると誓った。
……でも俺はこのとき忘れていたんだ…高町家に起こる……ある事件のことを…

プロローグ（後書き）

短い、更新遅いが僕のモットーです（笑）

第一話（前書き）

やっとできた更新…遅いな…

おいしい麦茶です。更新遅くてすいません。自分が遅いのは部活があるからです。

どっかの正義の味方の真似をして弓道部に入ったのが運のつきww

ww

それではどうぞ！

第一話

俺が4歳位のある日、父の土郎さんが大怪我をして帰ってきた。

今思うと俺は本当に浮かれていたのだろう。

夢が叶い、幸せで、こんな大事なことを忘れていたのだ。

俺はさほどリリカルなのはに詳しいわけではないが、そんな事は言い訳にならない。

俺があの時、止めていれば……いや頑固な父の事だ、俺が止めようが、止めまいが結果は変わらない。

それから俺たち生活は一変してしまった。

楽しかった朝食は重い雰囲気包まれ、会話もなく、忙しい店の経営で疲れる母……

それを手伝う姉と、毎日、夜遅くに汗だくで帰ってくる兄……

俺にできることはなんなんだ？

第一話　　彼は再び剣を手を取った

俺がまず最初に思いついたのは店の手伝いだった。

この体ではたいしたことはできないだろうが、助けにはなるはず。
さあ、いまこそ親孝行の時！

「って……思っただけだな……」

結果としては断られた。それも最悪な結果に。

「いい子でまってなさい……か……」

怒鳴られるのは予想外だった。母が怒鳴るなどと誰が予想できるのか。

子供を甘やかすのが好きで、いつも笑顔なお母さん。それが高町桃子だ。

でも無理も無い、大事な夫が大怪我で入院してるのだ。
自分は仕事が忙しく碌に見舞いにも行けない、そんなんじゃストレスは溜まる一方だ。

「なのはもこんな気持ちだったのか…？」

この事件のせいで、彼女はどんどん歪んでいくのだろう、知らず知らずの内に。

もしなのはがいたら、助けてやりたいところだがその必要は無い。

高町なのはがいない世界、これは最近気づいたことだ。

あとで生まれるのか？と思っていたが、高町なのははいつになっても生まれない、何故か？

簡単な話、高町なのはが高町なのはの居場所を奪ってしまったのだ。

「はあ……」

深くため息をつく。中身は成人しかけているが、かなりショックで立ち上がれそうに無い。

「そういえば、ジュエルシードは誰が回収するんだ？」

ふと、そう思った。

アニメでは、高町なのはが偶然にも魔法に出会い、ジュエルシードを回収するのだが…

ここには高町なのはがいない、その時点でこれはリリカルなのはでは無い。

予想できないことが起こる可能性もあるのだ。

- もしかしたら、家族に被害が及ぶかもしれない -

考えるだけでゾッとする。

一人の女のわがままのせいで幸せな家庭が壊されるのだ。
そんなことを許してはいけない、なら俺のすべきことはなんだ？
少なくとも……

「こんな所で落ち込んでる場合じゃないよな……」

俺はナイフを片手に、外に飛び出した。

「ああ、もう…やりにくい、な！」

俺は町外れにある山の奥に来ていた。

俺が今できることそれは、いつか来るジュエルシードに備えて体を鍛えることだった。

この体になってからは鍛錬などしたことはなかったが、祖父の剣術はすべて頭に叩き込んである。

「痛っ！」

また指を切ってしまった。これで3回目だ。

ナイフをもってきた理由は、木を削り木刀を作るためだ。

本当は、父達の木刀を使えばよかったのだが、大きさが合わなかった。

短めの木刀もあったが、あれは二本セットで置いてあった、あれはおそらく二刀流用だろう。

なので仕方なく自分で作ることになったのだ。

「やっとできた……」

もうここらでやめてしまいたいところだが、俺は木刀を作りに来た訳ではない。

とりあえず、全力で木刀を振ってみた。

「フッ！」

ひょんつと弱弱い音がした、スピードもまったく出てない。舌打ちをしたい気分になったが、いかんせん4歳児の体だ。この程度だろう。

それから、木刀を振り続ける。何度も、何度も…

弱弱しかった音が、だんだんと力強い音に変わってゆく。

何だかんだ言って、俺は剣術が好きだ。だからこそ、守るためにこの技術を選んだのだろう。

「あつ……」

カランつと木刀が手から落ちた。

つい、夢中になってしまった、俺は限界を超えてしまったらしい。

（晩飯までに、俺は帰れるだろうか……？）

薄れ行く意識の中で最後に思ったのは、そんなことだった…

なんで、弟がこんな所に？

少年…高町恭也は、地面にうつ伏せに倒れている弟を見てそう思った。

自分は、町外れにある山の奥で修行していた。

己の剣術を余り人に見せたくない自分にとつてはここは最適な場所だった。

父と義妹と共に来ることもしばしばあった。

だがその父は今家にはいない。

ボディガードの仕事で大怪我をしたのだ。

聞いた話では、子供を爆弾から守って負った傷らしい。

俺は自分が許せなかった。

力の無い自分が。無論、力があつたとしても父は自分を連れて行かなかったはずだが。

それでも、俺は無力な自分が許せなかったのだ。

だからこそ、いつもの倍の修行をしていたのだ。

そして、水分補給をしようと川に降りてきたらなの太がいた訳である。

「ん？……コレは……？」

なの太の近くには、少し無骨な木刀と小さなナイフが落ちていた。ナイフの方には見覚えがあるが、木刀のほうには見覚えがない。

（犯人は……美由紀だな……）

高町家には刃物が非常に多い。

なの太が生まれてからは、ちゃんとしてまって置くようにと第17回目の高町家族会議で決まっていたことだ。

あの何処か抜けてる義妹のことだ、うっかりしまい忘れたのだろう。

「しかし、これはすごいな。」

木刀を見て感心する。

弟にこんな特技があるとは知らなかった。

たしかに少々無骨だが、4歳児が作ったとは誰も信じないだろう。

思えばよくできた弟だった。

赤子のころはほとんど泣かず静かな赤ん坊だった。

父は父さんと呼び、母は母さんと呼んだ。おそらく俺の真似をしたのだろうが…

礼儀正しく、家族の分の食器を運ぶこともあったし、洗うこともあった。

俺より年上に見えることも少くない。

普通なら気味が悪く感じるのだろうが、俺たちはなの太が好きだった。

それはなの太も同じだろう、なの太は家族が好きで好きで溜まらないのだ。

故に俺たちがなの太を嫌うことは無い。なの太は家族愛に満ち溢れているのだから。

だから……

「だから…何もできない自分が悔しかったんだよな……なの太。」

母親譲りの栗色の髪の毛をさらさらとなでる。

なの太の手には浅い切り傷とマメがあった。倒れるまで木刀を振り続けていたのだろう。

それほどまでに悔しく思ったのだろう。

「俺は……何をやってるんだ……」

地面に拳を叩きつける。

「徹」を籠めた拳が地面に当たり、雑草が吹き飛んだ。

闇雲に無茶な修行をし、家のことはすべて母と義妹になげやり。

これでは、家族を守るどころか、迷惑を掛けているだけではないか！

こんな修行を続けていてもまったく實力は上がらない。

むしろ体を壊して一生、剣士として完成できないかもしれない。危うく大きな間違い犯すところだった。

倒れているなの太を抱える。思ったより軽かった。

俺は気づいたのだ、外敵を倒すだけを守ることではない。

「ありがとう……なの太……」

弟の横顔を覗き込む。

その顔は悔しさで歪んでいたが、何処か満足そうだった。

第一話（後書き）

誤字報告、アドバイス等よろしくお願いします。

第二話（前書き）

更新遅くてすいません。

それよりこの小説、読んでくれる人いるのかなあ……

いきなりですが、大会に出ることになりました。

更新が更に遅くなるかもしれません……

第二話

父が帰ってきた。

どうやら父の鍛え抜かれた体を俺はなめていたらしい。

今じゃ、「リハビリだ!」とか言って兄さんと姉さんをしごいてるらしいけど。

父が帰ってからは、家に笑顔をが戻ってきた。

喫茶翠屋も兄が手伝うようになってからは、母も楽になってきたようである

姉さんは……料理が上達しないらしい……兄が犠牲になった……

俺か？俺は……

「フツ！フツ！」

こうやって、剣の修行を続けてるわけである。

ちなみに家族には言っていない。まさか息子が戦争で使われた殺人剣なんて修行してるとしたら…

父たちの剣術を俺はよく知らないが、間違いなくやめさせるだろう。だが、これは必要な力だ。ここで修行をやめるわけにはいかない。

俺の剣術には特に流派名は無い。

祖父が作り上げた、我流の業だとか。名乗りたけりや、自分で考えろとか言ってたな。

なんでも祖父は、軍刀一本で戦っていたらしい。

対人戦はもちろん、戦車や戦闘機とも戦える、万能剣術だとか…

最初は半信半疑だったが、自動車を真つ二つに斬ってしまう祖父を見たなら信じるしかなかった。

とは言え、そういった人間をやめている業は今ではできない。せいぜい素振りや、基礎体力をつけるランニングくらいだ。

小学校に入学したら、やろうと思っている。

まったく、この体の身体能力の高さには驚かされてばかりだ。前の俺より、強くなること間違いなしだ。うれしいかぎりである。

「……ふう……」

素振りをやめる。今日の修行はここでおしまい。

日もちようど傾いてきたようだし、丁度いいだろう。

いつぞやは、倒れるまでやってしまったが、あれは間違いだ。

祖父が言うには、食事と同じように修行も腹八分目くらいが丁度いいらしい。

そうすることによって、前の修行でできなかった不満が次の日には大きくなり、修行に対する意欲が沸いてくるらしい。

さて帰るか、今日の晩御飯は何かなあ…

「たいしたもんだ……」

高町士郎と高町恭也は、なの太の修行を見てそう思った。なの太が隠していたことは、兄と父に普通にばれていた。家族にもばっちり。

高町親子は感心していた。それはなの太の素振りのことである。なの太の素振りは「叩く」のではなく「斬る」になっているのだ。剣術の基本がちゃんとできている。

おそらくは恭也達の修行を見て学んだのだろう、凄いとしか言いようが無い。

「で……どうするんだ、父さん？」

「ん？どうつて？」

「なの太に「御神」を教えるのか？」

「うーん……」

士郎は一瞬迷った。

たしかになの太の才能は優れている。このままではもったいないだろう。

だがなの太に「御神」を教えないのは昔に決めたことだ。

せめて妻と末っ子だけは平和に暮らしてほしい。それが、士郎……いや家族の願いだったはずだ。

「いや教えないよ。なの太に限って力の使い方を間違えるわけが無いしな。」

「そうか……」

恭也はどこか不満そうだったが、納得した。

きつと、弟に剣術を教えたかったのだろうが、美由紀で我慢してくれ。

さて、そろそろ帰らなければなるまい。

なの太の速さなら、すぐに家に着いてしまうだろう。

（しかし、このままではいけないな、なの太とはいつか「お話しなくては……」

何気に、なの太に死亡フラグだった。

「なんだ……今の寒気は？」

第二話（後書き）

誤字報告、アドバイス等よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1638m/>

ただ剣を振るう

2010年10月11日04時32分発行